

障害者スポーツ支援研究

障害者スポーツ研究からアダプテッドスポーツへの展開

——学生に提供する資料を考える——

三浦 敏弘^{*}・小田 慶喜^{**}

Abstract

The purpose of this study is to provide information for understanding impediment. Students have to recognize the goal of "healthy and spiritually rich living filled with laughter" at Department of Health and Well-being in KANSAI UNIVERSITY. The faculty aims to promote regional projects regarding sports, wellness and welfare, while providing opportunities for students to learn about healthy lifestyle through community sports and field work.

Especially, it is necessary to do sports to construct healthier lifestyle for all people. Students should attend the practice and the lecture concerning sports for the disabled, and improve the ability. It is important to understand sports for challenged people in at Department of Health and Well-being in Sport and Wellness Course, Social Work and Well-being Course.

I. 緒言

人間の障害に関する理解を講義においてどのように展開するかは、対象となる学生の理解の度合いや生育環境も含め、考えていかなければならない課題である。

1995年に出版された総理府編集の「障害者白書平成7年版」¹⁾には、「バリアフリー社会を目指して」の中で、「障害は個性」という障害(者)観を取り上げ、社会環境における障害への考え方が提起された。この「障害は個性」の考え方には賛否両論があり、共通の理解が得られたとは言いが、人間社会において障害をどのように考えるかを提起したものととして、理解しておく必要がある。

この提起に対し鈴尾²⁾は、障害児教育の実践的立場から、国語科において、「わたしのえほん、ぼくのえほん」をテーマとして、自己決定を促す手ばかりに関する授業の展開を実践している。このよう

な積極的取り組みが、障害に関する理解を促し、人間社会における障害に関する理解を深める取り組みにつながるものと考えている。また、医療保健領域の作業療法等の分野においては、積極的に人間の障害に関する考え方を論議し、実践する講義が展開されている。人間健康学部における学生の指導に関しても、このような取り組みを参考にして、学生に障害を考えることの重要性が示されなければならないと考えている。

本研究においては、人間の障害に関して体育領域やスポーツ領域における実践的な取り組みを考え、人間健康学部で学ぶ学生にどのような資料提供ができるのかを考察することを試みた。

II. 「障害は個性」を考える

前述の総理府編集「障害者白書平成7年版」¹⁾には、「バリアフリー社会を目指して」の中で、「障害は個性」という障害(者)観を取り上げ、社会環境における障害への考え方が提起された。以下にその部分を示す。

* 関西大学

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35
Kansai University (Part time lecturer)
3-3-35 Yamate-cho, Suita-City, Osaka 564-8680

** 姫路獨協大学

〒670-8524 兵庫県姫路市上大野7-2-1
Himeji Dokkyo University
7-2-1 Kamiono, Himeji- City, Hyogo 670-8524

『「共生」の考えを更に一步進めたのが、障害者自身や障害者に理解の深い人達の間で広まっ

てきている「障害は個性」という障害者観である。我々の中には、気の強い人もいれば弱い人もいる、記憶力のいい人もいれば忘れっぽい人もいる、歌の上手な人もいれば下手な人もいる。これはそれぞれの人の個性、持ち味であって、それで世の中の人を2つに分けたりはしない。同じように障害も各人がもっている個性の1つと捉えれば、障害のある人となない人といった1つの尺度で世の中を二分する必要はなくなる。そうなればことさらに社会への統合などと言わなくても、一緒に楽しんだり、喧嘩をしたり、困っているときは、お互いに助け合い、支え合う普通の人間関係を築ける社会になるであろうというものである。

障害者を特別視する障害者観を払拭するためには、障害というものの正しい知識を普及する広報活動ももちろん大切であるが、社会のいろいろな場面に種々の障害のある人がいるのが当たり前という状況にする必要がある。

「街になれる、街がなれる」という味わい深い標語がある。障害者はどんどん街に出て街になれる。そのことによって街は、街に住む人々の意識も含め、障害者がいることを当然の前提とした社会になっていくという趣旨である。(平成7年度版「障害者白書」より引用)』

この総理府が示した「障害は個性」の考え方には賛否両論があるが、障害者白書の内容を、学生各自が障害(者)観に関して自分の考えを整理してみることに意義があると考えている。

1996年6月6日の朝日新聞の論壇には、小池³⁾による「障害は個性と考えたい」が掲載された。この一文は、今日の障害者運動の部分を形成している潮流に依拠している点において、日本の政策理念における「共生」の考えを更に一步進めた「障害者観」の記述として注目された。以下にその内容を示す。

『「障害は個性と考えたい」小池政文(総理府障害者施策推進本部担当室長)

昨年暮れに刊行された障害者白書の記述に対し、「障害は果たして個性なのか」という批判が新聞の投書欄にでていました。障害があること

を個性というきれいごとの表現で、歌が上手、下手といったことと一緒にしてほしくないという趣旨です。私の部署にも視覚障害者の方から数回にわたり、「障害は個性」などと一部の人が言っていることを閣議決定を経る政府の白書で記述するのは問題である、との電話をいただきました。欧米でも日本の学会でもそんなことを唱えている人はいないし、障害という概念と個性という概念は論理的に結びつかない。全盲などの重度の障害者が、厳しい状況の中に置かれているのに、障害者に対する公的サービスを不要とするような帰結を導く障害者観がまかり通るのは見逃せない、というものでした。

昨年の障害者白書では、「バリアフリー社会を目指して」を副題に、障害者を取り巻く四つの障壁(物理的、制度的、文化情報面、意識上の障壁)の除去をテーマにして、これまでの国や地方自治体の取り組み、今後の課題、展望などを記述しました。その中で障害者を特別扱いしない障害者観の一例として「障害は個性」という考え方・見方を紹介した「意識上の障壁」の箇所は、何人かの方から良くも悪くも「白書らしくない」と批評された部分でした。

私自身も含め多くの人に「障害はない方がいい」「障害があるのは不幸」とのぬぐいがたい思い込みがあり、それが障害者を差別したり過度に美談調で賛美したりと特別視する誘因になっています。論理的な表現ではありませんが、障害をこれまでにない前向きの視点からとらえた「障害は個性」の発想には、そんな思いを乗り越える可能性がある、と思いました。「さをり織り」の創始者城みさをさんは、知的障害者の織る作品の素晴らしさに感銘して全国各地への普及を進め、今では海外でも広く取り入れられています。

常識や決まり切ったルールにとらわれない作品は芸術性も高く、彼女は「障害は個性というより才能」とまで言っています。また、『ささえあい』の人間学(法蔵館刊)は、「障害は個性である」との主張には、障害者と健常者という二分法の下で「障害は克服すべきもの」「苦しくとも障害者はリハビリに励むべき」との一面

的な障害者観を見直す意義があると指摘しています。

もともとこの言葉は、我が国の障害者運動の中で、障害があっても人間として誇りを持って生きていきたい、という障害者の切実な願いの中から生まれた主張であり、白書に取り上げることへの迷いもありました。しかし、ともすればマイナスイメージで語られることの多い「障害」について、プラス思考のしなやかな発想があることを紹介したい気持ちの方が勝りました。重度障害者や重症の障害児を抱えている家族がこの社会で暮らしていくのはまだ大変なことであり、そんな現実を前にして「障害は個性」などと言うことに何の意味もないとの意見があるのも無理からぬものと思います。

障害のある人が普通に暮らせる社会にしているため、政府は昨年暮れに「障害者プラン」を策定しましたが、そのような社会の実現に向けて公的セクターの取り組むべき課題は山積しています。障害者観の問題は、各人の心・意識にかかわるものであり、白書の記述によって簡単には変わるとは思いません。ましてや基本的人権を保障している憲法の下では、「障害は個性」という見方一つで公的部門の責務が軽減されるということは決してありません。

一方で「障害は個性」と主張する障害者がいて、他方でその意見に同調できない障害者がいます。それぞれの主張はうまくかみ合う議論ではなく、どちらが正しいというものでもありません。高齢化が進み慢性疾患が主流の疾病構造の今日、何らかの障害のある人はいや応なく増え、ひとごとでは済まされない時代になっています。障害を、ない方がいいものと否定的にとらえるだけではなく、前向きに受け入れる発想も必要ではないでしょうか。行政担当者をはじめ多くの人がこの両論の意味するところを考えることが、障害者を特別視する社会の意識を変えていく契機になるのでは、と考えます。（1996.6.6 日付朝日新聞「論壇」より引用）

ここに示されている「障害は個性」という表現には、一人ひとりの違いを認め、障害を特別視しない

で受け止めようという意味がこめられているのであるが、「障害」をどのように理解し、「個性」をどのように理解するか、に関して、共通の認識を持つことの重要性和その難しさが存在している。特に障害児教育の領域である、教育支援や発達支援などの観点から実際の生活における場面での理解が必要となる。

個性とは、素質的なものも含め、人間の成長発達する過程で培われる有形、無形の要素がかかわり合い絡み合って形成されるものと考えるべきであり、「個性を伸ばす」や「個性を発揮する」などと表現する場合には、「障害を個性」という考えは現代社会において理解が難しい状況にある。

人間社会において、障害を負う可能性は誰にも共通にあり、加齢による諸機能の低下等はまさしくその部分である。たとえ障害を持っても、生活機能等において適切な障害者支援を考える社会を形成すれば、不安無く人間としての生活を楽しむことができることを共通の認識とする努力が必要である。

学生には、障害を有する人も含めて社会を形成することの重要性を考える場を提供する必要がある。

Ⅲ. 医療保健領域における取り組み

理学療法士及び作業療法士法第2条によれば、作業療法士とは、医師の指示の下に、作業療法を行うことを業とする者をいう。ここでいう作業療法とは、身体又は精神に障害のある者に対し、主としてその応用的動作能力又は社会的適応能力の回復を図るため、手芸、工作その他の作業を行わせることとされている。すなわち、移動、食事、排泄、入浴等の日常生活活動に関する日常生活動作 ADL (Activities of Daily Living) 訓練や、買い物、洗濯、電話、薬の管理、金銭管理、乗物、外出等の ADL を基本にした日常生活上の複雑な動作手段的日常生活動作 IADL (Instrumental Activity of Daily Living) 訓練を担う役割を果たす。さらに最近では、趣味活動も含めるようになってきており、日常生活におけるスポーツ等の指導も健康管理の点から必要になっている。

このような視点に立ち、将来作業療法士を目指す学生に対して HD 大学⁴⁾では、「アダプテッドスポーツ」の講座を必修として開講している。また、「作

業学実習Ⅲ」においても、集団レクリエーションや障害者スポーツの実践について学ぶ機会を提供している。以下にそのシラバスを示す。

アダプテッドスポーツ

【科学名】 アダプテッドスポーツ		【曜日・時限】
【単位数】 1単位	【開講期間】 前期・春学期	【担当者】 小田慶喜
【授業内容（到達目標を含む）】 アダプテッド・スポーツ（Adapted Sports）とは、スポーツのルールや用具を実践者の「障がいの種類や程度に合わせたスポーツ＝その場その場に適応させるスポーツ」という意味です。スポーツは一部特化したプロスポーツだけが注目を集めていますが、誰でもが楽しむ権利を持っており、創意工夫をして多くの人たちが楽しむ努力を惜しんではなりません。障がい者のスポーツも、「目が見えない」、「耳が聞こえない」、「車いす利用」といった状況を、用具やルールを工夫することで、みんな一緒に楽しむ努力をすることが基本になります。障がい者のスポーツだけでなく、高齢者のスポーツ、こどものスポーツなども、この領域に含めて考えていきます。 日本体育学会の専門部会には、アダプテッド・スポーツ科学専門分科会の設置が承認されています。アダプテッド・スポーツは、リハビリテーションの延長という考え方だけではなく、健常者や障がい者も含めた全ての人たちのスポーツ振興を担っています。市民レベルの楽しむスポーツから、パラリンピックで競われるスポーツまで、体育学、教育学、社会学、心理学、生理学、バイオメカニクス、工学、医学、その他の分野も含めて考えていきましょう。 これらの考え方を基礎にして、人に優しい町づくり、障がいに対する理解や障がい者の雇用についても考えるようにします。 日常生活においてスポーツを支援する場合、スポーツ医学に関する知識が重要な役割を果たします。健康とはどのような状態をいうのか、また、スポーツ活動や運動によってどのような健康への効果がもたらされるのかについてなど、スポーツ活動と健康（QOL）との関わりについて知識を持ちましょう。また、世代、年代別の健康とスポーツ活動・運動についての考え方を理解し、実践できるようになりましょう。		
【授業計画】		
1	セラピューティック・レクリエーション1	
2	セラピューティック・レクリエーション2	
3	プロジェクトアドベンチャー1	
4	プロジェクトアドベンチャー2	
5	ネイチャーゲーム1	
6	ネイチャーゲーム2	
7	シッティングバレーボール1	
8	シッティングバレーボール2	
9	フライングディスク1	
10	フライングディスク2	
11	ゴールボール1	
12	ゴールボール2	
13	スポーツチャンバラ1	
14	スポーツチャンバラ2	
15	車いすマラソン	

【教科書及び参考文献】 必要であれば授業中に指示し、使用するプリント等は授業中に配付する。		
【評価方法】		
<input type="radio"/>	出席	小テスト
<input type="radio"/>	定期試験	<input type="radio"/> 課題レポート
【評価基準】 成績は、出席状況 60%、課題レポート 20%、定期試験 20% として評価する。		
【備考】 ※作業療法学科学生に限る		

作業学実習Ⅲ

【科目名】 作業学実習Ⅲ（集団活動）		【曜日・時限】	
【単位数】 1 単位	【開講時間】 後期・秋学期	【担当者】 小田慶喜	
【授業内容（到達目標を含む）】 集団が持つ意味、集団を構成している個々の要因の理解、さらに活動を提供する際のポイントなどを学習し、集団を作業療法の治療手段として用いる上での基本的な知識と技術を習得する。 演習・実習では、学生が真剣かつ積極的に実技に取り組むことが望まれる。			
【授業計画】			
1	作業療法における集団活動（総論）		
2	作業療法における集団活動（総論）		
3	高齢者に対するレクリエーション・身体操		
4	高齢者に対するレクリエーション・身体操		
5	集団レクリエーション・障害者スポーツの実践 ふうせんバレーボール、シッティングバレーボールなど		
6	集団レクリエーション・障害者スポーツの実践 ふうせんバレーボール、シッティングバレーボールなど		
7	集団レクリエーション・障害者スポーツの実践 視覚障害スポーツ		
8	集団レクリエーション・障害者スポーツの実践 視覚障害スポーツ		
9	集団レクリエーション・障害者スポーツの実践 車いすスラローム		
10	集団レクリエーション・障害者スポーツの実践 車いすスラローム		
11	医療福祉現場で用いられている集団活動の分析		
12	医療福祉現場で用いられている集団活動の分析		
13	活動の実施（学生プレゼンテーション）		
14	活動の実施（学生プレゼンテーション）		
15	活動の実施（学生プレゼンテーション）		
【教科書及び参考文献】 必要であれば授業中に指示し、使用するプリント等は授業中に配付する。			
【評価方法】			
<input type="radio"/>	出席		小テスト
<input type="radio"/>	定期試験	<input type="radio"/>	課題レポート
【評価基準】 成績は、出席状況 60%、課題レポート 20%、定期試験 20%として評価する。			
【備考】 ※作業療法学科専門科目			

HD 大学におけるこのような取り組みは、学部を設置し学生を育てた経験から、完成年度をむかえてカリキュラムの改正を考える際に、新たに科目を追加した結果である。教員の負担は増加するが、作業療法士として将来期待される領域の能力を要請する必要性を積極的に取り組んだ例といえる。

寺田ら⁵⁾は、現場における作業療法士、理学療法士、看護・介護職など、保健・医療・福祉関係の専門職が、患者や利用者を支援するための技術書として、レクリエーション授業のテキストを作成している。その改定にあたり、新しい時代に合わせた改訂の必要性を強調している。

その主な理由として、①社会福祉基礎構造改革が推進、②介護保険制度が高齢者ケアの枠組みの基本となった、③障害者の支援費制度が障害者ケアに取り入れられた、④地域リハビリテーション支援体制が推進されている、⑤医療費抑制政策が促進された、⑥特殊教育が特別支援教育へと変わった、⑦ICIDH「国際障害分類」からICF「国際生活機能分類」へ、⑧ITなど技術革新が進んだことを示している。

医療系学部に限らず、人間の健康に関わる領域で学ぶ学生にとって、積極的に障害を理解させる講義の展開が必要となっている。

IV. 障害をどのように理解するか

「障害者」というときの「障害」の場合、「害」の字を避け「障碍者」「障碍」、あるいは「障がい者」「障がい」と書くべきとする動きが、当事者およびその周辺から広まってきている。1950年に施行された「身体障害者福祉法」において、「障害者」および「障害」の語が用いられたことから、それまで用いられていた「不具者」「癱疾者」といった語に代わって、「障害者」という新しい単語と、「障害」という語の新たな用法が一般に定着している。その後、「知的障害（者）」、「精神障害（者）」の分野においてもこれらの語が使われるようになった経緯がある。

2010年に文化審議会国語分科会より文部科学大臣に答申された改定常用漢字表では、2009年に実施されたパブリックコメントで「碍」の追加を要望する意見が多数あったが、審議の結果「碍」の追加を拒否する方針が決定されている。

HD 大学においては、公文書では「障害者」が使

われていることを理解したうえで、「障碍者」あるいは「障がい者」を使用することも積極的に実施している。交ぜ書きそのものが好ましくないとする批判や、文字の使用で本質的な差別の解消や待遇の改善につながるものではないとの考えもあることも理解して、学生には文字の使用に関しても考える場を提供している。

英文表記においても、この問題は考えなければならない課題でもある。特にスポーツに関する表記は多くの表現が混雑している状況でもある。

Karen P. DePauw⁶⁾らは、その表現に関して、「person with a disability」、「individual with a physical impairment」、「people-first」、「athletes with disabilities」、「athlete with a visual impairment」、「handicapped sports」、「sports for the disabled」、「adapted sports」、「sports for the disabled」などの表記を示し、実施する対象やスポーツの領域で使い分けをしている。

矢部⁷⁾は、障害者の体育・スポーツ活動を、どのような障害があっても僅かな工夫をこらすことによって、誰でもスポーツに参加（Sport for Everyone）できるようになると認め合うことの必要性を強調している。特に、障害者だけのスポーツに限らず、1本のロープは障害のある人と、ない人とのバリアーを取り除く手段となる、健全な伴走者とロープを握り合って走る盲人マラソンのように、健常者と一緒に競技するスポーツとして、インクルージョン実践を提唱している。このように、スポーツのルールや用具を障害の種類や程度に適合（adapt）させることによって、障害のある人は勿論のこと、幼児から高齢者、体力の低い人であっても誰でもスポーツに参加できる可能性の拡大を認めている。世界的に障害者という言葉を用いない傾向にあることを説明し、英語圏では、1970年代から障害者の体育・スポーツをAPA(adapted physical activity)とし、その概念はadapted physical education（障害者体育、APE）の発展型であるとしている。

また、なんらかの機能の不全（障害）があるために、日常生活や社会生活に制約を受ける人のことをチャレンジドパーソンあるいはチャレンジドピープル（physically challenged person, physically challenged people）と表現し、disabled person と

かhandicapped personという表現を制限し始めていることも事実である。肉体的に(physically)挑戦を要する＝障害のある(challenged)人(person)という意味で用いられ始めている。

HD大学では、作業療法士が障害者にだけ対応するのではないことを理解したうえで、幼児から高齢者まで対応できるレクリエーションやスポーツを理解する必要があることから、「アダプテッドスポーツ」と表現している。

V. 障害者スポーツの理解

2002年3月28日毎日新聞東京朝刊「記者の目」に、社会部斉藤⁸⁾記者が次のような記事を載せた。

『変質したパラリンピック 欠かせぬ国の財政的支援 斉藤信宏(社会部)』

日本の障害者スポーツを取り巻く環境整備は、世界水準と比べ大きく立ち遅れている。米国ソルトレークシティで開かれた冬季パラリンピック大会を取材して痛感した。「祭典」から「競技の場」への急速な変質に、まったく対応できていないと言っている。国は「リハビリの一環」という位置付けを改め、スポーツとして支援する態勢を早急に整えるべきだと思う。

アルペン女子のチェアスキーで銅メダル2個を取った大日方(おびなた)邦子選手(29)は「欧米との差は広がるばかりです。次の大会に日本選手が果たして出られるのか、そんな危機感さえ感じる」と話した。パラリンピックをめぐる欧米の動きは急ピッチだ。今回、初めて五輪とパラリンピックを同じ組織委員会が運営したことで、さらに五輪との連携が現実味を帯び始めた。大日方選手の言葉からは、こうした現実に対する選手側の不安がにじみ出ている。

欧米各国では既に、障害者スポーツの選手が五輪の強化選手と一緒に練習している。同じスポーツと位置づけて、五輪チームのコーチが指導するのが当たり前になっている。当然、選手も鍛えられ、レベルが急速に上がってきた。

日本では監督もコーチもボランティアだ。その奮闘ぶりには頭が下がるが、組織的な後ろ盾が弱すぎる。国としての方向性は一向に見えて

こない。

こうした現場の不安を日本パラリンピック委員会(JPC)は必ずしも共有できていない。「こちらでもできることはやるが、あくまで選手強化の主体は競技団体です」(若菜常信・JPC事務局長)と、戦略的な発想はうかがえない。

今回の選手団の田村宣朝団長は「一部の選手だけを強化するより、障害者スポーツの普及こそ大切」と力説した。しかし、障害者スポーツが「リハビリの一環」として位置付けられ、厚生労働省が所管しているために本来、絶好の普及の場であるはずの学校教育の中で障害者スポーツが取り上げられることは少ない。

例えば、アルペンスキーで活躍した佐々木如美選手(28)は立位の片腕機能障害クラスだが、「障害者スキーに自分が出られるクラスがあるなんて知らなかった。知人に『出られるんじゃないの』と言われて初めて気付いた」と話す。佐々木選手のような隠れた逸材を探すには、学校教育の中で理解を深めることが重要だが、文部科学省との連携が十分とはいえない。

競技力のアップや普及のためには、財政的な裏付けも必要になる。今回のパラリンピックでは、冬季では初めてスポンサーを集めた。入場券の売り上げも好調だった。五輪がいつかどった道にパラリンピックも一步を踏み出した。

日本選手団の幹部からは「商業主義にまみれては、パラリンピックのよさが失われる」(田村団長)などと批判の声が聞かれたが、ではどうやって障害者スポーツを発展、普及させるのか、となると明確なビジョンはない。仕方なく各競技団体の監督やコーチは、自ら企業を回ってスポンサーを集め、遠征費用をねん出している。もちろんすべてボランティアだ。現場の負担を軽減するためには、国による財政的なバックアップがどうしても必要だ。

選手の頑張りを見る者の心を打つ。私も取材しながら何度か目頭が熱くなった。特に、ノルディックのシットスキー選手、深沢春二さん(44)から聞いた、初めて雪原に出た時の話は忘れられない。

「一面真っ白な山に鳥のさえずりが聞こえるん

だ。もう二度と見られないってあきらめていた世界が目の前に広がっていた。雪がなかったら、車椅子じゃ絶対来られない場所だから、その時の感動は、とても言葉にはできないよ」

北海道で漁師をしていた深沢さんは、7年前に交通事故で下半身不随になった。しばらく家でごろごろしていたが、いつも「妻子に申し訳ない」と思っていた。そんな彼が初めて雪原に出た。車椅子では舗装された道路しか歩けない。ところがスキーなら、雪さえあればどこにでも行ける。深沢さんは「スキーで雪原に出るのは、船で海に出る感覚と似ている」と話した。

見る者を感動させるスポーツに健常者も障害者もない、と私は思う。同じスポーツとして、欧米のような取り組みができないものか。次の冬季パラリンピックまで4年間しかない。(2002年3月28日毎日新聞東京朝刊より引用)』

この記事は『変質したパラリンピック』として、パラリンピックを含む日本の障害者スポーツの実態を取り上げた。社会部記者は「祭典」から「競技の場」への急速な変質に対応できない日本の障害者スポーツの実態を指摘している。ソルトレークシティーのパラリンピックでは五輪組織委員会が運営したことを意識した発言である。オリンピックは本来のスポーツの在り方と大きく軌道を外れ、台本のあるエンターテインメントとしての行事へと変化していることを指摘している。それをより文化的存在への変化と受け取るもよし、画一化された感動を与えるための遊戯と受け取るのも自由である。選手はタレントをめざすのか、障害者関連団体の広報役を担うのか、技と能力を追求するだけでは、競技を続ける支援が得られない状況である。

観る者を意識した見せるスポーツの在り方は、将来の展望を大きく変化させる可能性がある。解説者やアナウンサーも意図的にその方向性を示唆しているのではないかと考えさせられる報道が多く認められる。報道記者として何を伝えようかと意識するのではない。プロスポーツが視聴者やファンの存在を常に意識して存在することを忘れてはならない。プレーを直接競技場で観戦し感動する人より、マスコミを通じて観戦した気分になったり、意見を言う

人が多くなったりすることが、現代スポーツの特徴でもある。テニスは、次のサーブ打つ時間まで短縮して、放送のために競技規則を改正させてきた。他のスポーツも放送時間短縮が、その課題である。スポーツを文化的活動と評価した記者の目は正しい。しかし、障害者スポーツにおいても、選手と同じ場所と同じ感動を共有する可能性は乏しいのが現実である。

学生に与える資料としては、どのようにことを伝えるべきであろうか問題となる部分でもある。たとえば、図鑑を選択する場合、存在を直接フィルムにとらえた写真のほうがより図鑑としてはふさわしいのか、見せるべき特徴を強調した作画のほうがより図鑑として価値があるのかの問題である。考える力を保持するまでは、意図的に加工した教育材料が必要であり、ある程度成長した段階で全部の素材にふれさせる必要が生じてくる。そうでなければ、最初から全部の素材にふれさせると、見落とすものが多くあり、教育効果が損なわれる可能性が高い。もちろん、そのようなことを理解して、何度も同じ体験を繰り返すことが重要であるが、現行の教育体制にそのような余裕は皆無である。文部科学省そのものは、学校教育におけるスポーツの実施そのものには、消極的な態度を取り続けた機関である。むしろマスコミが焚き付け煽り立てた可能性が高いと考えることが妥当であろう。

田村宣朝団長の「障害者スポーツの普及こそ大切」という考え方を、重視する必要がある。観る者を感動させるスポーツを重視する考え方には、難しい問題が存在している。スポーツは観るのではなく、実施するとともに感動する経験重視の参加型行事であることを、学生に伝える必要がある。健常者が感動するためにパラリンピックを持ち出すのは、障害者との共生という考え方からは、かけ離れた考えであると認識しなければならない。

VI. 障害者スポーツの現状

兵庫県加西市では、人権の取組全般を通じて、啓発活動における質的な向上に向けての効果的な手法に取り組んでいる。その取り組みの中でも「こころの国際化」を構築する目的で「愛の詩」作品募集し、どれだけ多くの人の思いやりや優しさにつつまれて

成長してきたのかを考え、子どもを想い、親を想い、そしてふるさとを想う『愛』のメッセージを公募している。入賞作品は、冊子にして人権啓発の運動に役立てている。2006年に募集された入賞作品の中に、障害者スポーツに関する小田⁹⁾の作品が掲載された。以下にその作品を示す。

『車いすで生きることを教えてくれた君に

車いすの君に出会ったのは、君が大学に入学してきた春でした。私は教員、君は学生で、私の仕事は君たち学生に、よりよく生きていくために必要な教養を教えることでした。しかし、実際に多くのことを教えてくれたのは君で、いっぱい多くのことを学んだのは私でした。君が教員の役を務め、私が学生になることが多かったのです。

君と知り合うまでは、私の専門である体育やスポーツのことは、何でも対応できると思っていました。しかし、その考えが完全に打ち砕かれました。車いすで通学すること、車いすで生活すること、車いすでスポーツを楽しむことなど、全て分からないことばかりだったのです。

体育実技の時間、車いすで参加できる種目を考え、できるだけ君にとって良好な環境を用意しようと考えました。しかし、妙案が思いつかず、相談した時の君の答はすばらしかった。

「何でもできます。やらせてください。もし、できなかったら、あきらめます」

そうなのです。まずやってみてからでいいのです。分からなければ、やりながら考えればいいのです。考えて、やってみて、その結果できなくても、やってみたことに価値があるのです。そして次のやり方を考えたらいいいのです。これが、私が君から教わったことです。がんばらなければいけないと、力が入ってあなたに接しようとしている私に、笑いながら話した言葉が、またすばらしかった。

「先生、リラックス、もっと楽に生きましょうよ」
兵庫県加西市平成18年度第8回「愛の詩」作品集より引用」

障害者のためのスポーツをどのように考えていく

かは、人権教育・啓発の推進と同様に考えていかなければならない課題でもある。しかし、現実的にはあまりにも障害者の生活を知らず、援助だけが優先され、障害者が考えて発言する機会を奪う可能性があることを認識しなければならない。小田は、車いすの学生と車いす競技を続ける中で、次のような文章を講義の中で資料として提供している。この資料は、大阪人権協会が公募したヒューマンメッセージコンテスト2004第2回人権エッセイコンテスト「すべての人が輝くために」に応募したものである。以下にその資料を示す。

『私は私立大学で体育の教員をしている。教養としての健康に関する知識と実践力を身につけてほしいと、生活の一部として取り組むことのできる体育の実践をめざし、学生に提供する授業に試行錯誤している。車いすの学生と取り組んだ車いす競技は、体育の教員が如何に狭い領域で仕事をしているかを実感し、私の体育教育に対する考え方を大きく変えてくれたと感謝している。

小学校の時校内の遊具で胸椎を骨折し、車いすでの生活になったが、努力して大学に入学してきた学生に、在学中より充実した学生生活を過ごすために、車いす競技に参加しようと二人で計画を立てた。

いくつかの市民ランニング大会に電話を入れ、車イスでの参加を問い合わせると、ほとんどの大会で前例が無いと断られたのである。多くの大会が市民マラソン大会と称し、参加の条件に自己責任で誰でも参加可能と記載しているにもかかわらず、参加の許可が出ないのである。

私が家族と参加していた大会などは、競技中に「最高齢者の参加者は〇〇さんです」と大々的に放送して、安全な大会であることを強調しているにもかかわらず、車イスで参加を相談すると、電話を回されたあげく最終的に断られるのである。市民という範疇の中に、障がい者が入っていないことに驚き、主催者の努力しない態度を腹立たしく思った。

ひどい場合には、「コースに階段があります」「コースは細く木の根等がたくさん出ている、車

いすは走行できません」などと断られたこともある。事実であれば、そのようなコース設定は、一般ランナーにも危険であり、開催者の能力が疑われるところである。さらに、ショックだったのは、次年度からの開催要項に『車いす不可』の文字が入り始めたことである。

市民マラソンと銘打つからには、市民に門戸を広げる努力をすべきである。多くの市民が手を取り合って、ランニングを楽しむことのできる大会が増えてほしいものである。』

スポーツイベントに理解あるランニング大会主催者であっても、障害者スポーツへの理解は不十分であり、市民マラソン大会における市民の解釈に差があることを、実体験に基づいて報告している。

障害を有する人々が、社会において平等にスポーツを実施する権利は、現状においてはかなり圧迫を受けているのが現状である。また、スポーツの実施が障害を有する人々の機能回復を助け、積極的な社会参加を促し、健常者とのバリアを取り除くことにつながることも事実である。しかし、日本の社会においては、健常者の実施するスポーツ、特にチャンピオンスポーツに重きが置かれ、障害を有する人々が実施するスポーツについての理解や普及が遅れているのが実情である。

VII. まとめ

学生に障害を理解する資料として提供すべき資料の選択は、重要な問題である。学生が日常生活において実施するスポーツ活動の中で、障害を有する人たちが積極的に参加しているスポーツ種目を則した資料提供が望ましい。柔道¹⁰⁾、水泳¹¹⁾などにおける障害を有する人のためのプログラムを理解しながら、本来の障害者スポーツ¹²⁾にも対応することが必要である。

特に、1999年にドイツで出版されたLutz Worms¹⁰⁾の“Judo als Rehabilitationssport”『リハビリテーションスポーツとしての柔道』は、身体の機能障害だけでなく、発達障害やコミュニケーションの訓練としてのリハビリテーションとしての可能性を示している。

基本的には、アダプテッドスポーツとして、障害

の有る無しに関係なく、あらゆる年齢に対応できるスポーツの理解を促す必要がある。加えて、学生自らが積極的に考えて工夫することのできる環境を準備することが重要である。

最後に、小田¹³⁾の経験による障害者スポーツに関わる資料を以下に示す。

『「言い出せなくて」

私たちは日常生活の中で、安易に「頑張って」とか「ファイト」の掛け声を、発してはいないだろうか。「これ以上、どれだけ頑張ったら、どれだけ努力したら、満足してくれるのですか」と問われたことは無いだろうか。

人間ならば、常に行動に余裕を持って、事に臨んでいるはずである。ゆえに生理的にも精神的にも、全身全霊を発揮しない自己防衛反応が、組み込まれていると理解されている。

スポーツ心理学の分野では、この安全域の部分を解除して、本来のパフォーマンスを発揮させる手法が採られる。いや私たちも、日常生活で、「君の力はそんなものではない」、「私の能力はこれだけではない」と言い続けているのではないか。それをあらかず気持ちが、「頑張って」、「ファイト」なのである。

車いすで生活をする学生と共に、車いす競技の花形である、車いすマラソンを転戦した。

車いす競技は、オリンピック後のパラリンピックで申し訳程度に放送されるが、多くの人たちは認識していない競技である。好成績をあげる選手は、事故で両脚の自由を失い、努力に努力を重ねて、競技を継続する人が多い。私に関わった学生も、そうであった。

事故での脊髄損傷後、絶望感から這い上がり、どれだけの時間をかけて頑張ったことであろうか。多くの時間と欲望を犠牲にして、車いすに自分を埋め込んできたのだろうか。参加する選手たちに、その努力を強く感じた。

実際の競技では、必死に前のライバルを追いかける。ゆっくりではない、激しい命の燃焼を感じる瞬間でもある。「よくぞここまで努力した」と声をかけて拍手を贈りたくなる。

しかし、日々の練習の苦しみや、テープで固

めた手のコブや、からだの紫色のあざを知って
しまったら、「もうそれでいいよ」と思ってしま
う。今以上に「頑張れ」や、「ファイト」とは、
決して言い出せない自分がいる。』

参考文献

- 1) 総理府編 (1995)『障害者白書平成7年版』総理府、
pp. 11-12.
- 2) 鈴尾修司 (1999)「自己決定を促す手がかりに関する
一考察 : 国語科「わたしのえほん, ぼくのえほん」
の実践過程より (障害児教育) (III 各研究グループ
の考え方と実践)」『広島大学附属小学校研究紀要』
pp. 133-138.
- 3) 小池政文 (1996)「障害は個性と考えたい」1996年6
月6日付朝日新聞「論壇」.
- 4) 『姫路獨協大学医療保健学部作業療法学科2010年度
SYLLABUS』
- 5) 寺山久美子 (2004)『レクリエーション 社会参加を
促す治療的レクリエーション』三輪書店、1-34.
- 6) Karen P. DePauw, Susan J. Gavron (1995), *Disability
Sport, Human Kinetics*, 3-19.
- 7) 矢部京之助、草野勝彦、中田英雄 (2004)『アダプテ
ッド・スポーツの科学』市村出版、pp. 3-4.
- 8) 斉藤信宏 (2002)「記者の目」2002年3月28日毎日
新聞東京朝刊.
- 9) 小田慶喜 (2006)「車いすで生きることを教えてくれ
た君に」兵庫県加西市平成18年度第8回『愛の詩』
作品集.
- 10) Lutz Worms (1999), *Elemente des Judo als
Rehabilitationssport*, Meyer & Meyer Verlag.
- 11) Jürgen Innenmoser (1988), *Schwimmspaß für
Behinderte*, Fahnenmann.
- 12) Folker Scheid (2002), *Facetten des Sports Behindert
er Menschen*, Meyer & Meyer Verlag.
- 13) 日本文学館編集部 (2005)『言い出せなくて』日本
文学館、pp. 76-77.